

日本國政府

荒木

追加豫算の國民經濟に及ぼす影響について
 追加豫算（一般會計、特別會計及び地方財政）の國民經濟に及ぼす影響を、追加豫算の普通歳入を「〇〇」億圓とし、歳出が「〇〇」億圓の場合並びに「〇〇」億圓を減える場合の赤字を「〇〇」億圓毎に區分して推算すると、次のとおりとなる。

（昭二一・九・一〇）
 理 調

（單位 億圓）

| 追加豫算による赤字 | 貯蓄目標額 | 通貨増發額 | 公債消化余力 | 本年物價騰貴率 | |
|-----------|-------|-------|--------|---------|--------|
| | | | | 本年七月對比 | 本年四月對比 |
| 〇 | 七九二 | 〇七五 | 二八七 | 一・七六 | 二・六一 |
| 一〇〇 | 九四二 | 一六五 | 三三一 | 一・八二 | 二・七〇 |
| 二〇〇 | 〇九二 | 二五五 | 三三五 | 一・八九 | 二・七九 |
| 三〇〇 | 二四二 | 三四五 | 三五九 | 一・九四 | 二・八七 |
| 四〇〇 | 三九二 | 四三五 | 三八三 | 二・〇〇 | 二・九六 |
| 五〇〇 | 五四二 | 五二五 | 四〇七 | 二・〇六 | 三・〇五 |



日 本 國 政 府

説 明

一 國民經濟に及ぼす影響の推算是左の基礎によつた。

(一) 當初豫算總額を二六九一億圓、當初豫算による赤字を四四六億圓とした。

(二) 産業資金の所要額を過去の実績に鑑み、財政支出の五〇%と見積つた。

(三) 金融機關の資力純増額(貯蓄純増額)を実績に基き財政の赤字及び産業資金の合計(すなわち貯蓄目標額)の四〇%と推算した。

(四) 公債消化余力は、融資率則により資力純増額の四〇%とした。
 (五) 國民資力に對する消費の率(消費性向)は家計調査等から八五%と推定した。

(六) 生産の増加率は、經濟安定本部の案により年間一・二倍とした。

(七) 昭和二十一年度の國民消費は、政府投資二一八億圓、産業投資六五五億圓、消費率八〇%(投資率二〇%)から三四九二億圓と推計した。

(八) 昭和二十二年三月對七月の物價騰貴率を日本銀行の調査により

日本國政府

三〇五對四五・すなわち一對一・四八とした。
物價騰貴率は、赤字の漸増に伴い、心理的影響その他を通じて
加速度的に上昇すると考えられるが、この補計では加速度は一
應考慮しなかつた。

日 本 國 政 府

二 影響計算明細表

| 追加計算による 赤字 | 財政支出總額 | 財政赤字總額 | 産業資金 | 貯蓄目標總額 | 金融機關の資力 純增額 | 通貨増發額 | 公債消化餘力 | 國民資力 | 國民消費 | 本年四月對比物 價騰貴率 | 本年七月對比物 價騰貴率 |
|---------------|--------|--------|-------|--------|----------------|-------|--------|-------|-------|-----------------|-----------------|
| 0 | 1,691 | 1,346 | 1,346 | 1,793 | 777 | 1,075 | 287 | 1,399 | 989 | 2.61 | 1.76 |
| 100 | 1,791 | 1,396 | 1,396 | 1,945 | 777 | 1,165 | 311 | 1,503 | 1,087 | 3.70 | 1.82 |
| 100 | 1,891 | 1,446 | 1,446 | 2,097 | 837 | 1,255 | 335 | 1,606 | 1,199 | 3.79 | 1.94 |
| 100 | 1,991 | 1,496 | 1,496 | 2,249 | 897 | 1,345 | 359 | 1,709 | 1,294 | 3.87 | 1.98 |
| 100 | 2,091 | 1,546 | 1,546 | 2,401 | 957 | 1,435 | 383 | 1,813 | 1,398 | 3.96 | 2.00 |
| 100 | 2,191 | 1,596 | 1,596 | 2,553 | 1,017 | 1,525 | 407 | 1,917 | 1,493 | 4.04 | 2.04 |

(單位 億圓)

財政算明細表算出方式

$$(\text{財政支出}) = (\text{当初豫算}) + (\text{追加豫算})$$

$$(\text{財政赤字}) = (\text{当初豫算赤字}) + (\text{追加豫算赤字})$$

$$(\text{産業資金}) = (\text{財政支出}) \times 50\%$$

$$(\text{貯蓄目標}) = (\text{産業資金}) + (\text{財政赤字})$$

$$(\text{資力純増}) = (\text{貯蓄目標}) \times 40\%$$

$$(\text{通貨増發}) = (\text{貯蓄目標}) - (\text{資力純増})$$

$$(\text{公債消化余力}) = (\text{資力純増}) \times 40\%$$

$$(\text{國民資力}) = \frac{(\text{財政支出}) \times (1 - \text{消費性向}) + (\text{産業資金})}{(1 - \text{消費性向})} \quad \text{この場合の財政}$$

支出は当初豫算の中國民資力に關係のない62億圓を控除してある。

$$(\text{國民消費}) = (\text{國民資力}) \times (\text{消費性向})$$

$$\left(\begin{array}{l} \text{本年四月對比} \\ \text{物價騰貴率} \end{array} \right) = \frac{(\text{國民消費}) + (\text{通貨増發})}{(21\text{年國民消費}) \times (\text{生産増加率})}$$

$$\left(\begin{array}{l} \text{本年七月對比} \\ \text{物價騰貴率} \end{array} \right) = \frac{(\text{本年四月對比物價騰貴率})}{1.48}$$